

<分担研究報告>

小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究

分担研究者 高野 陽

発育発達評価は、乳幼児期の各種健診・保健指導、学校健康診断、小児医療の現場など、小児の生活しているあらゆる場面で実施されているだけでなく、保育現場や家庭の育児のなかでもそれ相応の方法で実施されており、小児の生活場面では非常に日常的なことである。それ故、発育発達の評価基準の設定は重要な意義をもつことはいうまでもない。特に、今日のように小児の生活の多様化、換言すれば、養育の多様化が進むときに、それぞれの年齢や生活実態に応じた発育発達評価基準の作成が要望されるようになることは否定できない。この視点から、本研究においては発育発達に影響を及ぼすと考えらるる諸因子を分析検討することによって、発育発達の評価基準作成のための有効な資料の収集とともに、発育発達評価に必要な影響因子の解析を行ない、効果的な保健指導や生活指導の実践に役立てることを目的とした。

それで次のようなリサーチ・クエスチョンを設定し、それぞれに見合う研究協力者を得て3年間の研究を実施し、今年度はその3年次を迎えて、目的にそうべく研究成果を認めることができた。リサーチ・クエスチョンは、(1) 乳幼児の発育発達評価基準は妥当か？ (2) 乳幼児の発育発達に養育条件は影響するか？ (3) 発育発達に地域差は認められるか？ の3点で、これを以下の4人の研究協力者の方々に担当して頂いた。即ち、窪田英夫東京家政大学教授・八倉巻和子大妻女子大学教授・南部春生札幌天徳病院小児科部長及び東郷正美東京大学教育学部教授で、それぞれリサーチ・クエスチョンに従って、(1) 乳幼児の発育発達の縦断的研究

(窪田英夫・研究協力者) —リサーチ・クエスチョン1, (2) 食行動からみた養育条件と発達に関する研究(八倉巻和子・研究協力者)及び(3) 乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究(南部春生・研究協力者)—リサーチ・クエスチョン2, (4) 発育発達にみられる地域差に関する研究(東郷正美・研究協力者)—リサーチ・クエスチョン3, を設け、研究をお願いした。

この研究における一つの大きな特徴は、4つの研究が全て縦断的研究で行なわれており、個々の研究は乳幼児期・学齢期・思春期と別個に行なわれてはいるが、全ての研究を通じてみれば出生から思春期までの一貫した発育発達の評価や指導の指標作成を目指したものであり、縦断研究の意義を強調することによって発育発達評価基準作成の方向性を検討し、小児期全般の保健指導・生活指導に貢献するものである。

以下、個々の研究の結果の概要を示す。

(1) 乳幼児の発育発達の縦断的研究(窪田英夫・東京家政大学教授)

乳幼児期の発育発達の評価は各種健診・保健指導、小児医療は、保育所やその他の乳幼児の生活の場において日常的な業務であり、さらに個々の家庭においても母親や家族の大きな関心事でもある。その評価の基準として、現在活用されている乳幼児身体発育値は横断的収集による資料に基づいて作成されたものであり、縦断的資料による発育発達評価の指標との関連性を検討することによって、より望ましい発育発達の評価基準のあり方が検討でき、乳幼児期の発育評価が効果的なものとなろう。

この目的にそって、全国規模で縦断的に収集された資料に基づいた発育発達の評価指標の作

成を試みた。全国の地域性を考慮した53施設から、約3000人の出生例を1歳過ぎまで追跡をし、体重・身長・胸囲・頭囲の各計測値と精神運動機能発達状態・栄養状態等の内容を調査した。各計測値とも1990年度厚生省乳幼児身体発育調査結果に比してやや大きい値が得られた。また、出生体重別に発育状態を追跡した結果、出生体重の差のままで各月齢を経過していることも判明した。現在活用されている乳幼児身体発育値は縦断的発育値と顕著な差が認められないが、実際の発育状態の評価においては出生時の状況を十分に配慮した評価が必要であることを示唆している。今後可能な限り、縦断的調査に基づく資料の収集に努めたうえでの発育発達評価基準作成に臨むことが望ましいといえる。

(2) 食行動からみた養育条件と発達に関する研究（八倉巻和子・大妻女子大学教授）

食事は小児期の中でも最も基本的な育児行動であり、養育者の訴えの中でも最も多いものの一つであるとともに、その解決の方法には苦慮することが多い。それ故、保健指導のなかでも重要な項目とされてはいるが、多くの問題点が存在することも事実である。特に今回はその中でも、養育者の訴えとして上位に挙げることができる「遊び食べ」に注目して、その発生の要因やその状態の発生時における養育者と乳幼児との関連を検討し、保健指導・栄養指導や生活指導の実践に役立てることを目的とした。

研究方法は、乳幼児の養育にあっている母親に対するアンケート調査と個々の乳幼児の家庭及び保育所における食事場面に見られる子と養育者との行動をビデオ画像の分析により行なった。「遊び食べ」など食行動上の問題の見られる乳幼児の母親の養育態度には必ずしも良いものばかりでなく強制や干渉等の態度が多くみられ、この点を十分に考慮した保健指導・食事指導の必要性が示唆された。また、食事場面の分析からは、乳幼児の食事に関わる人的条件の影響があり、養育者が乳幼児の行動を適切に判断した子との関わりの重要性がうかがわれ、この点を強調した今後の指導や保育条件の設定が必要であることが一層明確にされた。

(3) 小児の発育発達に影響を及ぼす保育条件

に関する研究（南部春生・天使病院小児科部長）

女性の就労の増加にともない保育需要の伸びは大きく、さらに保育形態にもその多様性が見られるようになった。その意味からも保育条件の乳幼児の発育発達に及ぼす影響については十分な検討が急務となっている。

この研究では関東及び北海道の約20施設・約1500名の保育所乳幼児を対象に、保育者の人的条件・保育意識・家庭の状況などと乳幼児の継続的に健康状態・発育状態の分析が行なわれた。この結果、特に入院を要するような疾病による一時的発育停滞は見られるものの、ほぼ順調な発育状態を示しているが、保育条件や家庭の条件にともなう乳幼児の種々の健康状態に与える多くの問題点が把握でき、個々の乳幼児の条件に応じたきめ細かい保育の実践が必要であることの再確認をしたといえる。

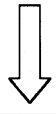
(4) 発育発達にみられる地域差に関する研究（東郷正美・東京大学教育学部教授）

発育発達に影響する因子の一つとして古くから地域の条件が指摘されてきた。発育発達の評価にあたってその地域差は如何なる影響を及ぼし、評価における障害となるようなことが必ずしも十分に検討されてきたことはない。この点を明確にし評価基準作成の問題点を検討することを目的に研究が実施されてきた。この場合は、学童・生徒さらに思春期の児童を対象とした発育評価基準策定に目標がある。

時系列調査に基づく資料を活用して東京や多くの地域の児童の身体計測値を資料に研究が継続されており、その結果として発育には複雑な様相を呈しながら増加の経過が見られ、その傾向にも地域差が生じていることが示された。

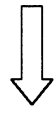
また思春期の児童の継続計測された値を用いて、身長最大発育速度・その年齢・そのときの発育値の地域差を考慮に入れた検討を行い、その結果これらの値を総合して全国的規模の発育評価基準作成を行い得ることが示唆された。

以上、4班の研究成果を簡単に示した。これらの研究は小児保健の基礎的領域ではあるが、この成果に基づき多くの現場における実践活動にとっては非常に有効な資料が得られたものと確信しており、適切な活用を期待したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



発育発達評価は、乳幼児期の各種健診・保健指導、学校健康診断、小児医療の現場など、小児の生活しているあらゆる場面で実施されているだけでなく、保育現場や家庭の育児のなかでもそれ相応の方法で実施されており、小児の生活場面では非常に日常的なことである。それ故、発育発達の評価基準の設定は重要な意義をもつことはいうまでもない。特に、今日のように小児の生活の多様化、換言すれば、養育の多様化が進むときに、それぞれの年齢や生活実態に応じた発育発達評価基準の作成が要望されるようになることは否定できない。この視点から、本研究においては発育発達に影響を及ぼすと考えらるる諸因子を分析検討することによって、発育発達の評価基準作成のための有効な資料の収集とともに、発育発達評価に必要な影響因子の解析を行ない、効果的な保健指導や生活指導の実践に役立てることを目的とした。